

低学年児童期の 学習

～保護者のみなさまへ～



第2回

「読む力」の習得が全ての教科学習の出発点



子どもの正式な学習活動は、**小学校入学**をもって始まります。つまり、**6歳頃**から一貫したカリキュラムや指導の下で読み書きや計算などを子どもたちは**学ぶ**ことになります。これは世界的に共通のようで、教師がボードに書く文字を一定距離から視覚的にとらえること、鉛筆を握って文字を書くことのできる年齢が6歳頃であることと関係しているようです。



ただし、日本の子どもの多くはすでに**2～3歳頃**から文字や数字に触れています。したがって、先行体験の豊かな子どもは小学校入学時点で読みがかなり達者になっていますし、なかには漢字も書ける子どもがいます。さらには、算数の足し算や引き算が結構できるようになった子どもも少なくありません。では、**そういう子どものほうが常に学業面でのアドバンテージを維持しているのでしょうか。**専門家によると、実際にはそうではないようです。



たとえば**読み書き**を例に考えてみましょう。文字を読んだり書いたりすることを早くから教えられても、それは子どもの知的興味からではなく、大人にあてがわれて始めたものです。したがって、がんばっている子どもでも、**親が喜び、ほめてくれることが動機づけ**になっているケースが大半で、**真に身につけているわけではありません。**そもそも**文字は人間社会で生じた必要性から発明されたものです。**目の前にいない人間との交信や意思伝達への強い願望が文字を生み出したのです。**子どもが文字を学ぶにあたって、実際に使うことの利便性を肌で感じてこそ、学習は地に足のついたものになります。**



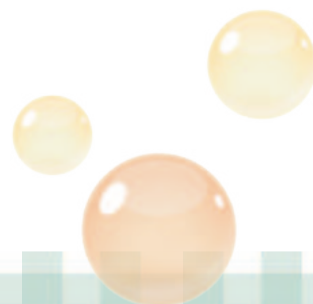
このことを踏まえ、うえで低学年児童の保護者にご留意いただきたいのは、形式的に覚えればよしとするのではなく、**文字がいかに便利なものかをお子さんが実感しながら学ぶよう配慮すること**です。くれぐれも先取りすることに気を奪われないようお願いいたします。たとえば、ある日学校から帰宅したとき、おかあさんからの手紙が机の上に置いてあったとします。その手紙に、「**ゆうべは、ちゃわんやさらをかたづけてくれてありがとう。たすかったよ**」と書いてあったなら、お子さんは大喜びするでしょう。そして「**ぼくも（わたしも）へんじをかこう**」と、一生懸命になって書こうとするのではないのでしょうか。これが大いなる進歩を生み出します。**こうした実体験を通して、目の前にいない相手への伝達を可能にする文字が、いかに便利なものかを実感しつつ学んだ子どもは、だいたい2年生の前半までに先行体験のある子どもに追いつき、追い抜いてしまいます。**



ともあれ、ここで新2～3年生のご家庭の**お子さんの読みの現状**を確かめてみましょう。**教科書でも児童書でもよいですから、1ページ分を声に出して読ませてみてください**（命令してやらせるのではなく、楽しい雰囲気のもとでお願いします）。スラスラと滑らかに読めるでしょうか。一度も躓かずに読み進められるお子さんはすばらしいですね。なかなかスムーズに読み進められない、誤読が多いのは、**言葉のまとまりや接続の関係が瞬時に識別できない**からです。こういうお子さんは、**文の流れから意味を抽出することがうまくできませんから、読んでも理解が不十分**です。たとえたくさんの本を読んでいても、実際にはちゃんと読めておらず、挿絵などを頼りにおおよそのストーリー展開を楽しんでいるだけかもしれません。**躓きや誤読の多い**お子さんは、今のうちに音読を励行し、声に出してよどみなく正確に読めるようになりましょう。




ある日、おじいさんと
おばあさんは…





なぜ音読が読みの力を巻き返すうえで有効なのかについては次回お伝えします。すでにお伝えしたように、全ての教科の学習は文字を使って行われます。文字なしに学習活動は成立しません。この文字を操るといふ行為の中心になるのは「読み」です。言い換えると、「読みを制する者は学力を制する」と言っても過言ではありません。したがって、小学校の低学年期の学習の柱の一つは「読み」の力を磨くことで、それが全ての教科の学習の進展を支えるのだとご理解ください。だからこそ、新年度の学習が始まった今のうちにお子さんの読みの現状をチェックし、もしも不十分ならすぐに読みの力を鍛え直すことをお勧めするしだいです。



今回は、読みの力の進展が語彙の発達に影響を及ぼし、それが子どもの内面の発達に重要な役割を果たすことについてお伝えします。